JSGS-Net 若手研究者と育児ワーキンググループのあゆみ

お茶の水女子大学大学院博士後期課程、COE 研究員
武内　佳代

リフレクションミーティングから託児サービス導入へ

お茶の水女子大学21世紀COEプログラム「ジェンダー研究のフロンティア」(F-GENS)の最終年度にあたる2007年10月、全体シンポジウムにおいて託児サービスが導入された。これまで託児サービスについては、シンポジウムや各サブプロジェクト主催の学会・研究会・講演会など（以下、学会）の開催に際して再三検討されてきたが、実施に至ったのはこれが初めてである。学会は基本的に土日に開催されるものが多い。そのため、とりわけ認可保育園を利用する研究者にとって参加しづらいものとなっている。日中だけの土曜保育を頼むことも可能ではあるが、日曜のみ、土日にまたがるもの、あるいは夜までかかる学会などについては、やむなく出席を諦めたり、家族に全面的に頼らなければならない場合が少なくない。もちろん家庭で育児の中心を担うことの多い女性の場合、週末の学会参加は余計に難しいものとなるのは言うまでもない。このような状況への対応策として求められるのが、学会への託児サービス導入である。

さて、今回初めて託児サービスが導入に至ったのは、何よりも、リフレクションミーティングの存在が大きい。リフレクションミーティングとは、若手研究者の声を掬い上げるために、F-GENS 事業推進者の先生方によって定期的に開催されてきた会議である。その会議において、若手研究者側から託児サービス導入の要望が出された。そして、その声を、戒能民江拠点リーダーをはじめとする事業推進担当者の先生方が重く受けとめてくださり、託児サービス実施にむけて、改めてご尽力くださったのである。これによって、ようやくF-GENS において初めての託児サービスが実現し、しかも利用者や関係者が口をそろえて、とても質の高い保育であったと評価するような非常に満足のいくものとなった。その意味では、確かにこれは F-GENS にとって一つの画期的な出来事だったといっていいだろう。だが、その託児導入までの長い道のりを振り返るとき、より重要に思えるのは、託児サービス導入の画期性を喜ぶことよりも、むしろこれまでの学会において託児サービスがいかに困難であったか、そして今なお困難であり続けているか、ということだ。

育児と研究の両立という〈見えない〉問題との直面

学会などに託児サービス導入を阻む最たる要因、それにはまず、人件費・施設賃貸費・保険料金などの高額な経費があげられる。もしサービスを導入した場合、託児経費は学会開催費のなかで大きな比重を占めることになる。とりわけ、COE プログラムのように国による補助金（校費）から学会開催費などをまかなう場合、「一部を私費で負担にする」といったフレキシブルな予算計上は不可能である。そのため、育児サービス利用者から費用の

一部を補填してもらうわけにはいかず、必然的に高額な託児経費はすべて学会開催費（校費）の負担となってしまう。通常の民間学術団体の学会では、託児サービスの全額かその一部を利用者に負担してもらうことによって、そうした開催費への圧迫を軽減している。言うまでもなく、限られた補助金（校費）において学会開催の経費がかさめば、その分、研究活動費を削る必要が出てくる。高額な託児サービスの全面的導入による研究活動費の大幅な削減は、ジェンダー研究の世界的拠点となるべく、より卓越した学際的、国際的な研究成果を目指す本 COE プログラム F-GENS の推進そのものの圧迫になりかねない。言い換えれば、F-GENS はわれわれ若手研究者に対し、より多くの、より幅広い研究機会を提供するために、代償としてやむなく託児サービスを断念せざるをえなかったわけである。

だが、その代償がいかに大きかったことだろうか。確かにこれまで、たとえ学会に託児サービスが存在しなくても、学生であれ、教授であれ、学会に参加したいと考える（とりわけ女性の）研究に携わる育児者は、自力で時間をやりくりすることがスタンダードとされてきたし、事実、そうした困難を見事に乗り越えてきた先輩の研究者は大勢いた。それゆえ、ごく最近まで、若手研究者が託児サービスを学会に要求することは「贅沢」「身勝手」なことと見なされがちだった。だがこれは、育児中の研究者が週末の学会への参加を個人レベルで断念する、という〈見えない〉メカニズムを生み出すこともあったのではないか。かたや、育児に携わっていない／携わったことのない学生や研究者にとって、そのようなイシューは、自らとは距離のある、まさに〈見えない〉問題でしかなかったように思われる。実際、独身であり、ましてや育児に携わってもいないわたしにとって、託児サービスの必要性を自らも引き受ける問題として考えてみようと思う機会は、これまでほとんどなかったといっていい。しかし、「若手研究者ジェンダー・スタディーズ・ネットワーク（JSGS-Net）」の発足以来、若手研究者たちが自らの力だけで企画や運営を行なうという場面が多くなればなるほど、育児と研究の両立は当事者だけの問題では済まされなくなった。

「育児」の共有に向かって

たとえば、若手セッションなどを企画する段階で、その企画会議の時間帯、場所が問題になった。会議は、基本的に若手研究者の非常勤の仕事や学業が一段落する夕方以降に行なわれたが、保育所の託児時間がおわる夕方以降の時間は、育児者は参加を諦めるか、子どもを家族に預けるか、あるいは子どもを会議に連れてくるしかない。言うまでもなく、育児をパートナーに任せることのできる女性研究者はいまだ少ないし、また、幸運にも実家の両親に任せられる者も決して多くない。そうしたなかで、子連れで参加する場合、あまり遅い時間が好ましくないばかりでなく、とくに乳幼児を同席させる場合は大人向けのテーブルと椅子しかない一般的な会議室の部屋は適さない。ちなみに、こうしたことは、「育児の〈現場〉から」（44 頁～）でコメントを寄せている小畑文さんのような妊娠中の女性が会議に参加する場合についても同様である。子ども同伴や妊婦である場合、あえていえば畳部屋が一番なのだが、学内会議室にそういった部屋は皆無であるといっていい。

こうして、育児中あるいは妊娠中の若手研究者も参加できる学会イベントの日時、および託児サービスの可能性などを探るための初段階において、育児と研究活動に関するいくつもの〈見えない〉困難を若手研究者の間で共有することになった。そうするなかで、自然と育児者とそうでない者との間に細やかな対話がうまれ、育児と研究の関わりの問題に

ついてともに再検討していく必要性を強く認識するにいたったのである。

以上のような経緯から、これまでの〈目に見えない〉代償を若手研究者たちの眼差しから改めて問い直すべく、JSGS-Net の分科会として私たち「若手研究者と育児ワーキンググループ」（以下、WG）は立ち上がった。男女を問わず現在育児をする者もそうでない者も、「若手研究者の育児と研究の両立可能な環境に関する提言」をともに模索する眼目のもと、現在までに、既婚者と独身者をあわせて 10 数名のメンバーを中心として会議・勉強会・メーリングリストなどで議論を重ねている。そのなかで情報収集とネットワーキングを行ないながら、最初の実践的活動として、先に触れた 2007 年の全体シンポジウムでの初の託児サービスのフォローアップに着手するにいたった次第である。

その後、本 WG は、その託児サービス導入で利用したお茶の水女子大学附属の保育所「いずみナーサリー」に関する勉強会を開いた。そして学会あるいは若手研究者個人によるいずみナーサリーの利用などについて、いずみナーサリー責任者の冨永典子教授にインタビューを申し入れ、二時間にわたる貴重なお話を伺うことができた。また次に、実際に研究と育児の両立を成功させた女性研究者の優れたロールモデルの代表として、本学の郷通子学長にもインタビューをさせていただいた。学長就任以来、本学から優れた女性リーダーを輩出すべく様々なプロジェクトを立ち上げるなかで、つねに若手研究者が研究と育児とを両立できるよう環境整備に取り組んでこられた郷学長からは、若手研究者同士の議論からだけでは得難い応答をいただくことができた。

このような WG のあゆみ、成果を、本冊子ではそのまま「実践編」として収録する。今後の展望については、本編最後の「若手研究者と育児ワーキンググループの展望」にあるとおりだが、これまでの WG の活動・調査成果を今後もできる限り広く発信し、研究者同士で共有していくことを目指していきたいと考える。そして何よりも、今ここにある、私たちのなかに生まれた〈見えなかった／見えない〉ものへの想いを、より多くの若手研究者の方々と共有できればと心から願う。